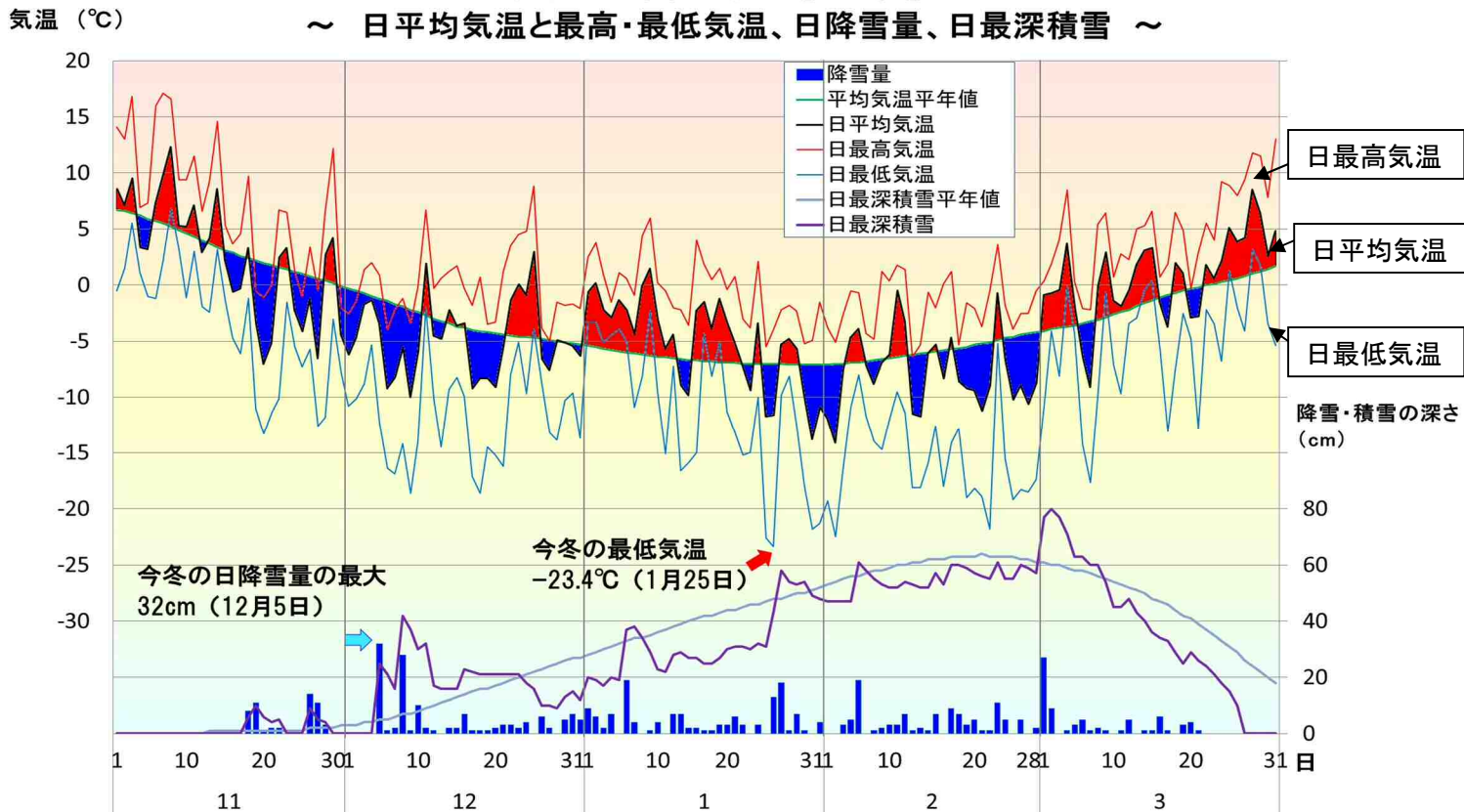


今冬の気象経過図 【恵庭】※

～ 日平均気温と最高・最低気温、日降雪量、日最深積雪 ～



気象庁予報部予報課航空予報室
航空交通気象センター 浜本予報官提供

※ 恵庭島松（気象庁の地域気象観測所(アメダス)）

平成 29 年 1 1 月～平成 30 年 3 月

月別経過

1 1 月＝上旬は比較的晴れる日が多かったが、中旬以降は北海道付近が大きな気圧の谷の中に入り、低気圧や前線が頻繁に通過した。通過後の中旬から、北極からの強い寒気が入って天気はぐずついた。20日の日最低気温-13、3°Cは、11月として低い方から第4位、11日の最大瞬間風速18、6 m/s（南）は、強風の第4位であった。

1 2 月＝シベリアの高気圧が強く、北海道付近は引き続き気圧の谷の中にあって低気圧の通過やその後の冬型の気圧配置で雪や雨の降る日がある一方、日が差す日も多く、月の日照時間105、5時間は12月として多い方の第4位であった。また、5日の降雪量32センチは、12月の多い方の第6位だが今冬の降雪量の最大となった。

1 月＝北海道付近は12月に引き続き気圧の谷の中入り、低気圧が北海道西岸で停滞することが多かった。このため、南から暖かい空気が入り、気温は中旬頃まで高くなった。9日の日最高気温6、0°Cは1月として高い方の第10位であった。

2 月＝カムチャッカ方面の低気圧から北海道付近まで延びる気圧の谷や寒気の影響で雪の降る日が多かった。このため、気温は低く経過し、月平均気温-7、7°Cは低い方の第8位となった、

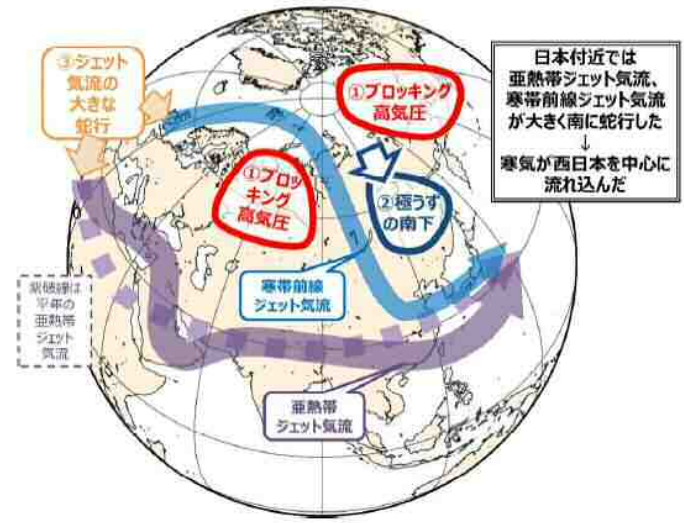
3月＝北海道付近は中国東北区と千島東の高気圧の張り出しの間で相対的な気圧の谷となり、低気圧が通過することが多かった。また、日本の東で高気圧が強くと、南から暖かく湿った空気が入りやすかった。

=====
今冬の特徴

1 1月中旬から12月中旬、1月下旬から2月上旬と寒い日が続きました。一方、12月下旬から1月中旬にかけて気温が高い日が多くなり、寒暖の差が大きくなりました。その要因として次のことが考えられます。

* 日本付近に強い寒気が流れ込むことが多かった要因としては、

- 1、亜熱帯ジェット気流と寒帯前線ジェット気流が日本付近では南に蛇行
 ⇨ 冬型の気圧配置の強まり。
- 2、亜熱帯ジェット気流が日本付近で南に蛇行
 ⇨ ラニーニャ現象の影響により、インドネシア付近の積雲対流活動が平年よりも活発だったこと。
- 3、寒帯前線ジェット気流が日本付近で南に蛇行
 ⇨ ユーラシア大陸北部の寒帯前線ジェット気流の大きな蛇行により、大気上層の極うずが分裂して、東シベリアから日本の北方に南下したこと。
- 4、ユーラシア大陸北部の寒帯前線ジェット気流の大きな蛇行
 ⇨ 大西洋上空のジェット気流の持続的な蛇行や、バレンツ・カラ海（ロシア北西海上）付近の平年と比べて海氷がかなり少ない影響。



平成30年2月上旬の大気の流れの模式図

註) ラニーニャ現象の影響が顕著に表れた年であった。エルニーニョ・ラニーニャ現象が日本の天候に影響を及ぼすことは過去から指摘されており、今冬も例外ではなかった。

注目すべきは4、で北極海の海氷が激減しており、地球温暖化の影響が如実に表れていると考えられている。今後も、海氷の減少が終息する気配は無く、このことによる北半球の気候変動が危惧される。(文責：清水)